



◎「自主創造・誠実信頼・刻苦試練」を校訓とする。2011年度に単位制に移行。生徒のさまざまな進路希望に対応できる科目選択、少人数授業や習熟度別授業によるきめ細かい指導を実践する。「文武両道」を伝統とし、部活動も盛んに行われている。

設立	1978(昭和53)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約320人
12年度入試合格実績(現浪計)	<p>国立大は、旭川医科大、小樽商科大、北海道大、北海道教育大、室蘭工業大、東北大、京都大、神戸大などに173人が合格。私立大は、藤女子大、北星学園大、北海学園大、北海道医療大、青山学院大、中央大、法政大、早稲田大、立命館大などに延べ377人が合格。</p>
住所	〒061-1112 北海道北広島市共栄305-3
電話	011-372-2281
Web Site	http://www.kitahiro.ed.jp/

北海道
北広島高校

進路指導

生徒の心を支える面談と 盤石の組織力で たくましい生徒を育む

変革のステップ

<p>背景</p> <p>◎学区統一により札幌市からの進学者が増加。単位制への移行も重なり、入学者の状況に変化</p> <p>STEP 1</p>	<p>実践</p> <p>◎環境変化の中でも、学校生活全てに全力を尽くさせながら、同時に面談指導を軸として生徒を支える指導は継続</p> <p>STEP 2</p>	<p>成果</p> <p>◎学校生活を楽しみながら希望進路を実現する生徒の姿が、難関大を含めた高い国立大合格実績に結び付く</p> <p>STEP 3</p>
--	---	--

学区統一、単位制への移行
押し寄せる環境変化の波

2009年度入試での学区統一以降、北海道北広島高校は度重なる環境変化に直面してきた。

学区統一前、北広島市の属する石狩管内は7学区に分かれていたが、学区統一により、札幌市も含めた石狩管内全体が1学区となった。公立・私立とも有力校のひしめく札幌市が同一学区になったことで、同校を取り巻く環境は一変した。地元中学校の成績上位層の中には、札幌市内の高校を目指す生徒が現れ、それにより同校では、入試倍率が下がったり、第1志望に手が届かなかった生徒が入学したりするようになったのだ。進路指導部長の浅井清志先生は次のように話す。

「多くの学校が受験対象となる中で、本校の良さや魅力を受験生に十分に伝えきれないこともあったと思います。本校に入学した生徒の中には、学力は高くて、学習意欲や本校への期待が低い生徒も見られました」
11年度に同校が単位制になったことも、環境を大きく変えた。推薦入試との兼ね合いで一般入試の定員が1クラス分以上削減されたこともあり、入試難易度が上がると噂が広がった。従来の受験層においても同校の受験を控える動きがあり、入学者の学力に若干の懸念も生じた。

学校生活全てに全力で頑張る たくましい生徒を育てたい

こうした環境変化の中、大学入試実績は、北海道大を始め、国公立大合格者数などについて変わらぬ実績を挙げ続けた。この実績に後押しされてか、高校入試の倍率や受験生の学力レベルも落ち着きを見せている。

こうした状態の背景には、自ら夢を描き、実現できる生徒の育成を目指し、そのために生徒をしつかり支えるという同校のスタイルを貫いて



浅井清志 あさい・きよし
北海道北広島高校
教職歴30年。同校に赴任して7年目。進路指導部長。「どのような立場になっても、決して偉ぶらないようにする」



島田勝教 しまだ・かつり
北海道北広島高校
教職歴31年。同校に赴任して12年目。2年次主任。「生徒に正面から向き合い、常にポジティブでありたい」



八鍬秀明 やくわ・ひであき
北海道北広島高校
教職歴18年。同校に赴任して14年目。1年次主任。「無理をしないで怠けない。とことん生徒を理解する」



正本英明 しよும்と・ひであき
北海道北広島高校
教職歴15年。同校に赴任して3年目。3年次担任。「自分は日本で一番力のない高校教師。だからこそ謙虚に学び続けなければならない」

できたことがある。2年次主任の島田勝教先生は、同校の方針を次のように述べる。

「本校では、夢を描き、その実現に向かって歩み続けられる、社会でたくましく生きていける人材の育成を目指しており、大学に行くことはその過程でしかありません。社会では、未知の課題や困難を乗り越える力が求められるでしょう。このような力は、机上の学習だけで養えるものではありません。だからこそ、本校では、**学習、部活動、行事など、学校生活の全てで全力を尽くし、目の前にあることや苦手なことから逃げない姿勢を育みたいと考えています**」

学校生活の全てに対して全力で取り組ませる同校に不可欠なのが、生徒の心を支える指導体制だ。

「本校の生徒の多くは、素直でどちらかというと控えめです。向上心はありますが、実際に向けて不安も感じています。学習や部活動で高いレベルを求めめるだけではなく、彼らの不安な気持ちに寄り添い、支えることで、生徒は心が折れずに全力で頑張り続けることが出来ると考えています。本校では、**進路指導とは生き方を考えさせることと捉え、「総合的な学習の時間」などで、社会の課題や学ぶ意味などについて考え、生き方を自ら判断させる指導をしています。生徒を支える指導があるからこそ、自ら考え、判断させる指導**

が出来るとだと思います」(浅井先生)

3年間を通じた面談指導で 希望進路を実現する力を伸ばす

生徒を支える指導の柱の1つは、体系化された面談指導だ。面談を重視するようになったのは10年程前のことだと、1年次主任の八鍬秀明先生は話す。

「私が本校に赴任して4年が経った頃、当時の学年主任が面談重視の方針を打ち出しました。担任が生徒と向き合い、生徒に寄り添いながら学習や生活のさまざまな不安を取り除いていく中で、生徒の教師への信頼感が目に見えて増し、その結果、大学入試で高い実績を挙げることが出来たのです。私たちは面談の効果を実感し、以後、面談は指導の基盤として重視されるようになったのです」

同校には3カ年分の進路面談計画がある。どの年次も年3、4回の面談を行うことを基本とし、年次・時期に合わせて「生活」「進路等」に分け、確認すべき内容を整理している(P.24図)。例えば、2年次第1回の「生活」では「クラスへの適応(孤立させない)」「部活動について」、第3回の「進路等」では「興味ある学問分野や将来の展望」「志望校群と選択科目」などで、担任が気を付けるポイントも示している。実施時期は計画に示されているが、計画にし

*プロフィールは2013年3月時点のものです

図 「平成24年度 2年次 進路面談計画(案)」(抜粋)

第1回 4月 5月	生活	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスへの適応(孤立させない) ・部活動について ・家庭環境・生活習慣・親子関係・交友関係 ・基本的な生活習慣の確立(欠席、遅刻、服装、頭髪など)
	進路等	<ul style="list-style-type: none"> ・学習意欲の喚起(「勉強は好きか嫌いか」「なぜ勉強するのか」など) ・授業に対する姿勢(授業の感想、得意・不得意、予習・復習の習慣) ・将来の夢や希望 ・興味・関心のある分野 ・自己の適性の把握(スタディーサポート、進路希望調査を参考に)
	留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスが変わり、不安を抱いていないか、溶け込めているか、友人がいるかなどを把握する。 ・3年次の科目選択に向けて、自己の興味・関心、能力・適性を把握させていく。
第2回 6月 7月	生活	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスへの適応(孤立させない)
	進路等	<ul style="list-style-type: none"> ・将来の夢や希望 ・興味・関心のある分野 ・自己の適性の把握
	留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスにうまく溶け込んでいない生徒に対し、適切なアドバイスをする。 ・進路目標について、「全く決めることができない」「迷っている」生徒の状況を把握し、科目選択に向けて考えるべきことを整理するきっかけをつくる。
7月～8月 保護者懇談(または三者面談)		

「平成24年度 2年次 進路面談計画(案)」には、2年次に行う第1回～第4回の面談の観点と留意事項を示している *学校資料を基に編集部で作成

からの語り掛けではなく、生徒の思いをアウトプットさせることを大切にします。それにより、生徒が自ら考え、自身の言葉で語ることができ、自分のしたいことに気付くと思いうからです。こうした経験が主体的に進路を考える力や自ら希望を実現していく力を育む

と思いますし、言語活動ともいえるアウトプットの積み重ねは、入試での小論文や面接にも生きると思っています」

教師への信頼があれば 生徒は勇気を持って学びに向かう

面談の内容を記録し、教師間で共有するツールとして、同校では「進路面談記録」が用意されている。生徒の生活・学習の状況、生活や進路への期待や不安などを記録し、3年間の生徒の変化を把握したり、クラス替え時の引き継ぎ資料として活用したりする。

ばられすぎないように、いつ、どのように行うかは学年や担任に任されている。ただ、全ての教師が日常的なコミュニケーションも含め、積極的に面談を行っている。

「まとまった時間を取れなくても、休み時間や放課後などのすき間時間を活用しています。清掃時間などに一言一言、声を掛け、表情を見るだけでも、生徒の様子が分かります。生徒にとっても話しやすい雰囲気になるようです」(八鍬先生)

面談で大切にしていることは、生徒に自分で考え、発言させることだと、浅井先生は話す。「面談では、こうした方がよいという教師

進学校でありながら、なぜここまで手厚い面談指導をすることにこだわるのか。赴任3年目で3年次担任の正本英明先生は次のように話す。

「赴任当初は、学校中で面談が頻繁に行われていることに驚きました。一見、生徒が教師に依存しているようにも見えましたが、私は、面談指導によって信頼関係が生まれているのだと感じました。面談をきっかけに生徒の目が教師を向き、困った時には教師が支えてくれると思えるようになれば、それが自立への足掛かりとなり、生徒は勇気を持って学びに向かい、進路実現に向けて力強く進めるようになるのだと思います。私も自然と面談指導に力を入れるようになっていました」

強固な組織力により システムとノウハウを継承

組織的な面談指導が可能なのは、3学年が足並みをそろえて、情報を共有する体制にある。

「本校の強みは、圧倒的な指導力のある教師がいるというよりも、むしろ組織力があることです。先生方は皆、責任感が強く、学年全体、学校全体で生徒を育てようという意識を持っていきます。教師間で密に連絡を取り、情報を共有していること、そのシステムとノウハウを受け継いでいることが、今の本校を支えていると思います」(島田先生)

同校では、10年程前から3年間の指導ストーリーを構築し、改善してきた。1年次から3年次まで3年分の学校行事やテスト、模試などの予定が流れとして見られ、それぞれの時期に生徒にどのような指導をし、どのような意識を持たせたいのかが分かるようになっていた。進路指導部を中心とした学年団がこの計画をよりどころにすることによって、教師の異動や担当学年の変更があっても、学年間で大きな差異が出ることはない指導が可能になった。

また、情報を共有するために、教科会議、学年会議、分掌会議などあらゆる会議の内容を全て記録し、公開している。いつでも誰でも閲覧できるように、常時2年分の会議録が職員室にファイリングされ、職員室のパソコンには5年分の記録が保存されている。

学年ごとに月2、3回発行する「進路だより」は、原則として校内で共有される。ある学年で新たな取り組みが始まれば、すぐに他学年にも取り入れられる。上の学年の「進路だより」を見れば、次年度に何をすればよいのかという方針も立てやすい。

「私は、『進路だより』を複数年分、ファイリングしています。紙を配るのは単純なことですが、この蓄積は大きな財産になっています。初めての学年であっても指導のポイントを受け継いで指導することは、生徒にとって何より必要なことです」(八鍬先生)

「当たり前」が実現できる 学校の誇りと伝統を正しく伝えたい

これまでに培われてきたシステムとノウハウに、組織力や日常の情報共有が重なることは、生徒の確かな進路実現の源泉になっている。12年度入試では、過去5年間で国公立大合格者数が最高となり、京都市に2人が合格した。毎年まとめられる卒業生の合格体験記には、「仲間と共に闘う団体戦の北広」「学校生活を楽しく」「逃げずに頑張れ」「先生方を信じて」という言葉が並ぶ。教師の支えのもと、夢へ向かってたくましく歩む生徒が確かに育まれている。今後の課題は、同校の正しい姿を、地域の中

学生や保護者などに伝えていくことだと、島田先生は語る。

「残念ながら、本校に、勉強ばかりの窮屈な学校だというイメージを抱いている方もいるようです。しかし、本校は、部活動や行事など、学校生活の全ての場面で仲間と共に楽しみながら、謙虚な気持ち、諦めない気持ち、達成感などを学べる学校です。当たり前のことですが、実は実現が難しい『当たり前』が伝統となり、先輩から後輩へ引き継がれていることが、本校の何よりの誇りです。真の本校の姿が、きちんと伝わるよう、中学生や保護者、地域の方へ発信していきたいと思っています」

情熱 若手教師が語る、指導変革への

本校の良さとベテランの先生方の エネルギーを受け継ぎたい

3年次担任 正本英明

本校以前の私の赴任歴は、職業学校と郡部の総合学科でした。センター試験を受験する生徒を指導するのは初めてだったので、赴任当初は本校の生徒にふさわしい進学指導が自分に出来るのかと不安に感じていました。赴任当時、30代以下は私を含めて数人のみ。周りはベテランの先生方ばかりという環境で、進学指導の基本を学べたことは幸運でした。また、本校の学習指導・進路指導の多くは体系化され、ノウハウが蓄積されているので、それらを参考にしながら、とにかく必死に教材研究や進路指導に取り組みしました。

本校に赴任して最も驚いたのは、ベテランの先生方が情熱を持って、エネルギーに生徒に向き合っていることでした。私とその年齢になった時、そこまで出来るのかと考えると身がすくむ思いもしますが、そうした先輩方の姿を見ているからこそ、自分も頑張らなければと強く思います。

今後も、生徒に真正面から向き合い寄り添う本校の伝統は、しっかり継承していきたいと思っています。これから新たに本校に赴任される先生方には、一見、泥臭い指導だと映るかもしれませんが、その「泥臭さ」こそ良さであり、これまでの先生方の思いを知っている自分こそが、今の本校の様子を次の先生方に伝えていかなければならないと感じます。良い点は継承した上で、その良さが保護者や地域に正しく伝わるように、情報発信に尽力していきたいと思っています。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2012年10月号指導変革の軌跡「埼玉県・私立西武学園文理中学・高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)